

令和元年6月25日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03122

研究課題名(和文)小アジアにおけるグローバル文化としてのギリシア文化とその地域性に関する研究

研究課題名(英文)Hellenization-Globalization in Asia Minor and its Diversities

研究代表者

師尾 晶子 (Moroo, Akiko)

千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：10296329

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、小アジアの諸地域が、周辺諸文明との接触によりどのように独自の文化を展開したかについて、リキアを事例に考察した。(1)前5世紀末のリキアの碑文文化には、アケメネス朝とアテナイ帝国双方からの影響が認められた。リキアの小王国が、ギリシア文化との接触を通じて、ギリシアの碑文文化を表面的に受容しつつ、アケメネス朝の支配理念を表現していたことは、東地中海における文化形成の過程を考察する上でも興味深い。(2)ヘレニズム・ローマ時代のリキア諸都市は、建国神話を利用し、再構成することで競合関係を表現してきた。建国神話は諸都市の力関係と同盟関係を示す一方、そこから抜け落ちた都市との対立関係も暗示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アケメネス朝の支配下にあったリキアが、碑文文化の受容において、アケメネス朝のスタイル以上にデロス同盟の影響を受けていた可能性のあることを明らかにしたことは、アケメネス朝とデロス同盟との相互関係を考察する上でも重要な視点となり得る。とくに、ギリシア側の視点から語られてきたデロス同盟の構造の見直しにおいて有効な視覚を示すと言える。

地中海世界の建国神話について、建国神話が政治の場で語られる契機、建国神話が作り替えられる契機について、リキアの一事例について明らかにしたが、今後、地中海世界全域について考察していくことで、神話と歴史という大きな枠組みで、日本も含めた比較研究が可能になる。

研究成果の概要(英文)： This research explored the process of Globalization, Glocalization and Localization in various places in Asia Minor through the cultural encounters with neighboring civilizations. Lycia was focused on the research.

Lycian Epigraphic Habit: It has been much discussed that the local dynasties in Lycia adopted the Achaemenid way of the display through which the legitimacy of their power was shown. I have presented that the Lycian epigraphic habit was much more influenced by that of the Athenian Empire. I particularly compared the first stele of the Athenian tribute quota lists to the Xanthos stele.

Lycian Foundation Myth: During the Hellenistic and Roman times, the strong penetration of Hellenistic culture influenced the Lycians on the way of understanding of their own history. Using the tradition of the local myths written by Greek writers, the Lycians themselves promoted and recreated their own history. The rivalries among the Lycian cities even encouraged the makeover of myths.

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：リキア 小アジア 建国神話 縁起譚 ローカルヒストリー ヘレニズム アイデンティティ 国際研究者交流

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、基盤研究 C「リキアにおける都市アイデンティティの形成とその展開」（2013-2015年度）の継続研究である。個人研究の形式をとっているが、年2回ほどの研究会を国内外の研究者を交えて継続的に開催することで、地理的空間から言っても時間的なひろがりから言っても幅広い古代の東地中海世界、とりわけ小アジア研究のネットワークを形成することを目指して計画された。

今日、少なからぬ西洋古代史研究者が、国内外ですぐれた論考を発表している一方、国内における共同研究プロジェクトや特定のテーマに関するセミナーはほとんどないというのが現状である。また、ギリシア史研究者の多くが、史料残存の状況もあり、古典期のアッティカに偏る中で、ギリシア史研究者とローマ史研究者が共通のテーマについて議論を交わす機会も減少の一途をたどっているようにみえる。そこで、ギリシア史とローマ史で区切るのではなく、ギリシア史研究者とローマ史研究者が、東地中海世界における文化移転とそれにとまなうアイデンティティの形成と展開について報告し合い、議論する場をもうけることを目的として、本研究課題が設定された。私個人は、2010年度から継続的に関わってきたリキアの一都市トロスの発掘への参加から、狭義にはリキアを検討の場とし、長いタイムスパンの中で、多様な政治権力、文化と接触してきたこの地域における文化形成と、文化の多様性について、地域特性にも着目しつつ考察することとした。

2. 研究の目的

上述のように、本研究課題にあつては、小アジア南西部のリキア地方に焦点をあてて、主として碑文史料と歴史叙述断片の分析に基づきながら、ギリシア文化の移入のあり方と、それによる土着文化の再発見と再構成の過程を抽出することを目的とした。また、国内外の小アジアを研究の場とする西洋古代史研究者とともにワークショップを開催し、この問題について、継続的に議論をおこなう環境をつくることをめざした。

3. 研究の方法

(1) 年2回程度（おおむね9月と3月）に研究会を開催し、意見交換をおこなう。2016年9月にはアテネ碑文博物館にて、Angelos Matthaiou 博士による碑文学セミナーを開催した。また、同年11月には、Christopher Tuplin 教授（リヴァプール大学）の講演会を開催し、アケメネス朝とギリシア世界との相互関係についての意見交換をおこなった。2018年3月には、Marc Domingo Gygax 博士（プリンストン大学）を交えてセミナーを開催し、歴史叙述に描かれる縁起譚と建国神話の普遍性と特殊性について議論した。2018年9月、Silvia Barbantani 博士（サクロ・クオーレ・カトリック大学）を招聘し、縁起譚と建国神話の生成とアイデンティティの表現をめぐるワークショップとセミナーを開催した。2019年3月に Antigoni Zournatzi 博士（ギリシア国立研究財団）と Nikolaos Papazarkadas 博士（オクスフォード大学）とワークショップを開催し、アケメネス朝とギリシア世界および周縁世界との相互関係について議論を深めた。また、碑文ワークショップを開催し、碑文史料の扱いについて具体的事例とともに検討した。

(2) 発掘にかかわったリキアの一都市トロスを中心に、リキア諸都市を踏査し、リキア語碑文（リキア語・ギリシア語二カ国語碑文を含む）およびリキア墓とヘレニズム・ローマ都市との共存・併存関係を明らかにする。

(3) リキアの碑文文化の展開を、アケメネス朝の碑文文化およびデロス同盟の碑文文化との関連からあとづける。

(4) ギリシア語作家によるリキア諸都市の建国神話を渉猟し、その流布の系統をたどる。そのうえで、建国神話のバリエーションとリキア諸都市間におけるライバル関係との関連性を、碑文史料、考古史料との比較を通じて考察する。

(5) ギリシア語文化圏に広がる建国神話・縁起譚の性格を整理した上で、リキアにおける建国神話の普遍性と特殊性を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 本研究課題に密接にかかわる、またゆるやかにかわる相当数の研究報告をおこなった。現在までに論文として公表されたものはそれほどないが、今後、それぞれの報告をもとにした論文が公開されていく予定である。いくつかはすでに公開の見通しが立っている。

(2) リキアにおけるギリシア文化およびギリシア語著作の流入が、ヘレニズム・ローマ時代のリキア諸都市の都市形成にいかなる影響をあたえたかについて考察することから研究課題ははじまった。ギリシア語著作におけるリキアについての言及は、ホメロスの『イーリアス』以来知られ、前5世紀のリキアの王朝にあつては、ギリシア語の韻文が碑銘に刻まれたことも知られている。さらにリキア語碑文であっても、柱状の碑文の形状や刻文の形態は、アケメネス

朝からの影響よりも、むしろギリシア語碑文、とりわけイオニアないしアッティカ碑文からの影響がおおきいと考えられる。リキア地方の碑文文化の展開について、アケメネス朝とデロス同盟=アテナイ帝国との双方からの影響を認めることからとらえなおすことは、東地中海における文化形成の過程を考察する上でも興味深い視点を与えてくれるように思われる。これについては、碑文文化に関する単著をまとめる中で、改めて考察していく予定である。

(3) ギリシア語文化圏におけるリキアの建国神話・縁起譚が、リキアにおいてどのように受け入れられ、受容されてきたかについて、Panyassis および Menekrates of Xanthos の歴史叙述断片とシデュマで発見された碑文 TAM II 174 とを比較検討することから考察し、報告した(学会発表 9, 10)。報告においては、リキア東部の諸都市における複雑なライバル関係とともに、建国神話が都市間関係の形成にどのように利用されたかについて明らかにした。地中海諸都市の同盟・対立関係の根拠としての建国神話の利用と、それによる建国神話の再生・創造については、他地域の事例も渉猟していく必要があるだろう。また同盟や都市間関係だけではなく、都市内部の特定の地域をめぐる問題を考える史料ともなり得ると考える。断片的で取り扱いのやっかいな歴史叙述の断片集について、今後、継続的な研究会やワークショップを開催することで、史料の魅力とともに研究材料としての可能性と研究手法について意見交換を重ねていく予定である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

1. Kazuhiro Takeuchi, Two Attic Demarchs Revisited, *Grammateion* 8 (2019) 5-10. (査読有、オープンアクセス有 <https://grammateion.gr/en/grammateion/8>)

2. 師尾晶子「奉納物からみた聖域と社会」『古代地中海の聖域と社会』勉誠出版、2017、107-137 (査読無)

[学会発表] (計 14 件)

1. Akiko Moroo, Some Notes on the Fifth-Century Attic Inscriptions, Epigraphy Workshop at Chiba University of Commerce, Chiba University of Commerce, 19 March 2019

2. Kazuhiro Takeuchi, Re-reading the Sacrificial Calendar from the Deme Thorikos OR 146 (*IG I³ 256 bis*), Epigraphy Workshop at Chiba University of Commerce, Chiba University of Commerce, 19 March 2019

3. Akiko Moroo, Self-Representation and Display of the Power and Empire: Persia-Athens Lycia, East Meets West: West Meets East, Chiba University of Commerce, 18 March 2019

4. Kazuhiro Takeuchi, Local Myths and Cults of Dionysos in the Atthidography, One Day Workshop: Approaches to Local Historiography, Chiba University of Commerce, 18 March 2019

5. 師尾晶子「古典期ギリシア史料に描かれるフェニキア人についての叙述」フェニキアカルタゴ研究会第5回公開報告会、放送大学東京文京学習センター、2019年3月17日

6. 竹内一博「アッティカの聖域における奉納碑文と奉納物：デーモスのディオニュソス祭祀の視点から」古代世界におけるメディアとコミュニケーション研究会、大阪大学、2019年1月28日

7. 竹内一博「前四世紀アッティカのデーモスにおける供犠と顕彰：ディオニュソス祭祀の社会的文脈をめぐって」史学会第116回大会、東京大学、2018年11月25日

8. 師尾晶子「碑文建立の作法と政治文化の表現」古代世界におけるメディアとコミュニケーション研究会、大阪大学、2018年10月1日

9. Akiko Moroo, Continuing and (Re)creating of Foundation Discourses in Lycia, One Day Workshop Approaches to Local Historiography, Chiba University of Commerce, 17 September 2018

10. Akiko Moroo, Development and Transformation of Local Myth in Lycia, The Fourth-Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World, Nagoya University, 4 September 2018

11. Akiko Moroo, *Paroikoi* at Rhamnous Revisited, From Markets to the Associations: Second International Conference, Kyoto University, 23 March 2018

12. 師尾晶子「碑文からみた知の伝達」第67回日本西洋史学会大会古代史部会小シンポジウ

ム基調報告 2017年5月21日 (一橋大学)

13. 師尾晶子「ミレトスとアテナイ・IGI³ 21 と *Milet* 6.3.1020」古代ギリシア文化研究所 2016年研究会、2016年11月5日 (東京大学向ヶ岡ファカルティハウス)

14. 師尾晶子「境界意識の表現とその伝播」科学研究費補助金基盤研究 A 全体研究会 2016年9月25日 (名古屋大学)

〔図書〕(計 3件)

1. T. Korkut / S. Urano (eds.) *The City Basilica in Tlos, Antalya*, 2019, ca. 640Pp. (in press.) Akiko Moroo, *The Inscriptions from the Basilica I*

2. 高島純夫・齋藤貴弘・竹内一博『図説 古代ギリシアの暮らし』河出書房新社、2018、128

3. 浦野聡編、師尾晶子ほか『古代地中海の聖域と社会』勉誠出版、2017、414、(師尾晶子「奉納物からみた聖域と社会」107-137)

〔その他〕(計 6件)

1. 竹内一博「書評：高島純夫著『アイネイアス『攻城論』：解説・翻訳・註解』」『白山史学』55号、2019年3月15日、137-141頁 (査読無)

2. 竹内一博「書評：R. Osborne and P. J. Rhodes (eds.), *Greek Historical Inscriptions 478-404 BC*, Oxford 2017」『西洋古典学研究』67号、2019年3月7日、122-125頁 (査読無)

3. 竹内一博「回顧と展望：2017年の歴史学界：ヨーロッパ：古代ギリシア」『史学雑誌』127-5、2018年5月、314-318 (査読無)

4. リエット・ヴァン・ブレーメン著・師尾晶子訳「ヘレニズム期カリアにおける *eis ta patrika*」『クリオ』31号、2017年5月、47-62

5. 師尾晶子「機織りの重り」『地中海学会月報』394号、2016年11月、8 (査読無、オープンアクセス有り <http://www.collegium-mediterr.org/report/2016年11月>, 394号/)

6. 師尾晶子「回顧と展望：2015年の歴史学界：ヨーロッパ：古代ギリシア」『史学雑誌』126-5、2016年5月、311-315 (査読無)

6. 研究組織

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：竹内一博

ローマ字氏名：Takeuchi, Kazuhiro

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。